

神奈川地区

行きたい時に行きたい場所へ

今までは外出時にしばしば介助のお願いも。
盲導犬がいて「出かけるよ」で行動もすぐ。



散歩でロずさんだ

鈴木加奈子さん(38) / 神奈川県 / 神

アリエル (LR ♀) ←ナンシー (MX ♀)

鈴木さんはプロのトロンボーン奏者として活躍している。生まれつき弱視だったが、小学校の頃は運動会で走ったりドッジボールもしたりしていた。授業も前の席で受けていた。中学生でトロンボーンと出会い、魅力に引かれ練習を重ねて音楽大学へ進学した。大学4年生の頃から視力の低下が進んだが、「楽譜は見えにくいけれど、私にはトロンボーンがある」を支えに首席卒業を果たした。

卒業後間もなく失明宣告を受けた。視神経の萎縮ということで具体的な病名は不明のままだった。白杖歩行も試みたが、目的地に着くまでにくたくたになり用をなさない。結局家族に付き添ってもらったり車で送ってもらったりで、外出の意欲も萎んだ。そんな時、ある盲導犬ユーザーのホームページで「見えていた頃と同じ速さで、風を感じながら歩くことが出来るようになった」という文章を見つけ「これだ!」と決めた。

「盲導犬」は単なる移動手段という言葉では量れない大きなもの、と鈴木さんは言う。1頭目のナンシーが来て、通学路だった農道を十数年ぶりに歩き、季節の移り変わりを覚えることが出来たとき、歩くということがこんなにも楽しくて、自分を



▲職場周辺での共同訓練。アリエルの速足も心地よくて笑顔に

メロディーを楽譜に〜“歩行の手助け、超える存在



▲東京・町田市のライブで演奏する鈴木さん、足元にはアリエルが

元気にしてくれるものだ気づいた。これといった目的のない日常のぶらり散歩が楽しい。頬にあたる風のぬくもり、花の香りも全部自分のもの。考え事をしながらも歩ける。

トロンボーン演奏用に作曲された曲はそう多くはない。だから散歩は鈴木さんの作曲の場でもある。犬の速度をコントロールしながらロずさんだメロディーを帰ってから楽譜にする。目が見えなくなった頃の曲は「ひかりのうた」。ナンシーと心で会話しているイメージの「with you」。ナンシーとの7年半の思いを手紙にした「Precious Seasons」。2頭目のアリエルとの曲は「天使のしっぽ」。アリエル(大天使)ほどよくしっぽを振る犬はいない。その他クラシック・ポップス調のオリジナル曲も多く、CDも多数出している。

“意地を張る自分、解放され

盲導犬ということで、どこへ行くにも「一人じゃない」という安心感も大きい。ステージに立つときも足元にぬくもりを感じながら演奏する。小さい時から「目が悪い分、皆と同じにしなければいけない」と意地を張る自分がいたが、そんな気持ちから解放されて、素直に人を受け入れられるようになった。人と会うのが楽しくなり、ライブでの演奏やトークにも余裕がでたと言われる。講演依頼もあり、障害の話、人生の話に盲導犬の話も交えて社会啓発にも一役買っている。

実はナンシーは、繁殖犬として一度出産しているお母さん犬。9頭産んだうちの8頭が盲導犬になったというから、折り紙つ

きの優秀な稟性(=生まれながらの性質)の持ち主だ。申し込んでナンシーに会うまで少し時間がかかったのも、舞台で楽器を演奏する足元で、大きな音にも動じずおっとりしてるお母さん犬がぴったりだったのだろう。鈴木さんも「ナンシーが守ってくれている感じがして、人生の宝物をもらったようだった」と懐かしむ。アリエルは「甘えん坊で、幼いところがかわいい。今度は私が守る番」と鈴木さん。

「健康」も盲導犬にももらった。前夜どんなに遅くなくても毎日の散歩は欠かさない。若いアリエルは小走りが必要になるくらい足が速い。スピードコントロールのために背筋を伸ばし姿勢もよくなる。排泄やブラッシングなど犬の健康にも気を遣い、面倒と思ったことはない。自然に毎日の生活リズムが出来上が

って健康になったと感じている。これから盲導犬を使おうという人には「とにかく一人の家族を迎え入れる気持ちでやって欲しい。排泄や健康の心配など、その気持ちになれば楽ですよ」とアドバイスを贈る。

カナエルペアまず夢一つ

「歩行を助けてくれるだけではなく、人生そのものを輝きあるカラフルなものにしてくれる——それが盲導犬と暮らすということ」と考える鈴木さんの夢は広がる。手始めはブラインドメイク(目の見えない人が自分でメイクする)の勉強にアリエルと名古屋まで1泊旅行した。ナンシーは、土と草のある屋外でないと排泄出来ないため、単独での宿泊旅行には二の足を踏んでいたが、ホテルの室内でも排泄OKのアリエルとならどこへでも行ける。演奏活動も海外にも広げたい。音楽以外にもチャレンジしたい。

加奈子+アリエルの『カナエルペア!』だ。夢の一つが今年6月に実現した。オランダで開かれた視覚障害研究の学会に参加する機会を得た。3日間の大会の最後にブラインドメイクの経験者としてスピーチを指名され、「それまで考えもしなかったお化粧が自分でできて、自信が持て、顔を上げて歩けるようになった」と心の変化を話した。学術的な発表が多くビリビリしていた会場が一瞬にして和んだ。

残念ながらオランダは狂犬病の汚染地指定のためアリエルはお留守番だったが、成田空港で自慢のしっぽ大振りの出迎えを受けた。(取材)

これが私の生きる道♪～PUFFYを口ずさみながら

須貝守男さん (63) / 神奈川県 / 神

クロス (MX ♀) ←リンディ (LR ♀)

私が日本盲導犬協会（以下、協会）を通じて初めて貸与された盲導犬はリンディ。今は二代目のクロスと暮らしています。クロスがデビューして間もない頃、ある飲み会の席で、ふと気づきました。「リンディがいなければ、ここにいるほぼ全員と出会わなかっただろう」と。実際、20名を超える参加者のうち、リンディつながりで知り合った人を除くと、残りは僅かに1名。「これは凄いことだ!」と感動しました。

活動範囲はもちろん、リンディは私の交友関係も拡げてくれたのです。私が代替えを希望してクロスとの出会いがあったのも、リンディとの生活が充実していたからこそ。大好きな芝居、映画、コンサートなどを、私は今も思う存分楽しんでます。飲み会も？あ、それは…クロス君に呆れられない程度には。

このまま失明したら、いったいどうやって…。20年ほど前の私の心は今にも降り出しそうな雨曇り。クロスと楽しげに歩く今の自分の姿をあの頃の私が目撃したら、「盲導犬が一緒なら目が見えなくなっても何とかなるのかも」と一筋の希望の光が差し込んで、不安も薄らいだのかもしれない。

ですが、当時の私は「たとえ失明しても、盲導犬とは歩かない」と決めていました。「視覚障害者を守るために常に緊張を強いられている盲導犬は寿命が短い」などと、まことしやかに語られる数々の虚説を、御多分に漏れず信じていたからです。子供の頃から大の犬好きだった私は、確かな根拠も無いままに「盲導犬は可哀想」と思い込んでいました。

それでも、本当はどうかの確かめたくなり、協会主催のイベントに2年連続で参加しました。それぞれ15分ほどでしたが、初めて一緒に歩いたハープからは盲導犬歩行の楽しさを、翌年のチャーリーからはその難しさを教わりました。最大の収穫は「盲導犬は可哀想ではない!」と実感できたこと。「盲導犬と歩いてみたい」という気持ちが芽生え、2000年の秋、私はついに新たな一歩を踏み出しました。

＊

あれから17年、幸い一つの事故も怪我などもなく歩き続け、色々な場所を訪れ、様々な体験を重ね、数知れぬ人々に出会ってきました。視機能のほとんどを失っても、「こうありたい」と願う「自分」は今も健在です。「役割も居場所も無くなる」と、将来を悲観して塞ぎ込んでいた自分が嘘のよう。

とはいえ、すべてが順風満帆だったわけではありません。犬との関係を思い悩むこともあれば、人々の無理解に接して（かつての自分は柵に上げて）憤慨することもありました。そんなとき、いつも二つの言葉が私を支えてくれます。

一つは、ある人が初めての共同訓練を終える間際に語ってくれた「この子と私は現在進行形。この子は盲導犬に、私もユーザーに、これから一緒に成長していく」という言葉。そう！初めから完成されたユニットなど、まず存在しないでしょう。年月と経験と共に積み重ね、より良い関係を築き、安全な歩行を

より確かなものとしていく現在進行形。その過程は、犬が引退する日まで続きます。昨日より今日。今日より明日…。

もう一つは「盲導犬のエンドユーザーは社会である」という言葉。「社会から協会を通じて盲導犬を貸与された視覚障害者が笑顔で街を歩けば、盲導犬の恩恵に最も浴するのは実は社会そのものである」という意味だろうと、私は捉えています。

冒頭に触れた飲み会に参加していた協会職員とボランティアの皆さん、店内の他のお客さんや店員さん、そして私も、皆が社会の一員です。あなたも私も皆がクロスのユーザー。クロスは社会の宝。彼と共に歩く特権を私は与えられ、そうすることで私は社会に貢献できる。このように考えると、使用者であり飼養者でもある私の責任も自ずと定まります。クロスを幸せにして、彼と力を合わせて安全に楽しく歩き…。

並んで歩くクロスと私の姿に人々の目が留まって笑みがこぼれたら、まさにその笑顔が私の社会貢献活動の成果です。犬が苦手な人、「盲導犬は可哀想」と今でも思っている人も笑顔にしてみたい。笑顔の輪が広がるように、クロスが引退を迎えるその日まで、まだまだ一緒に歩きます。それが私の義務ならば、何度でも行きますよ、居酒屋へ。さあストレート、ゴー！うん、いい感じ♪クロス、ありがとね♪これから、よろしくね♪



▲コンサートや観劇など、頻繁に足を運びます。会場ではクロスもすっかりリラックス

こんなふうに私もまだ笑えるんだ、と気付かせてくれた

碓谷純子さん (54) / 神奈川県 / 神

ジーン (LR ♀) ←スフレ (LR ♀)

人生を変えてくれたスフレとの最初の出会いは共同訓練2日目、スフレ1歳9か月、2008年のことだ。楽しそうで元気いっぱいの子。家族は天真らんまんなスフレの魅力にアツという間にとりこになったみたい。

目が不自由になるにつれて、子供の成長はとてうれしいのにどこか胸の底が締め付けられるようで、いつか私には感情が消えてしまうのか、そんな思いをもっていた頃だ。外出は誰かの手を借りて歩き、あまり楽しいとは感じられなくなっていた。

でもスフレが私のもとにやって来て数か月が過ぎて、フツと感じたことがある。いつものようにスフレを真ん中に息子と私とがじゃれ合っていたとき、素直にただただ大笑いをしている自分に気付いた。こんなふうに私もまだ笑えるんだ、本当に久しぶりかもしれない、そんな感覚が湧き上がってきて感謝で泣き笑いし



◀歩き疲れて公園でひと休みもスフレとの大事な思い出に

「世界に一つだけの花」を探して

板嶌憲次郎さん (46) / 神奈川県 / 神

フレア (LR ♀)

今は目はほぼ見えないけれど　美しく輝く何かが見える
フレアと歩くこの道は「いろんな花」が咲いていた
何げない日常は変わらないけど
きっと心の中の景色が変わったんだ

「この中で誰が一番だなんて」
わたしは盲導犬よ　あなたたちより賢いのよ
これは人間の世界のお話
盲導犬ってなあに　キャリアチェンジってなあに
そんなことは知らないよ
うれしければ　尻尾をふる　つまらなければ　そっぽ向く
どの子も「誇らしげに　ちゃんと胸をはっている」

「それなのに僕ら人間は」　肩書　社会的地位　成功
「どうしてこうも比べたがる」

た。それがついこの前のことのように。

そして、臆病で人見知りな性格の私が、盲導犬を知って欲しい一心で人前で話をしたりいろんな取材を受けたり、ハードルが高そうなことにもチャレンジできた。どんなときにもスフレがそばにいたから。

二人っきりの初めての遠出は私の故郷への里帰り。もう一人

では歩くことなどないと思っていたこの道をスフレと歩けた。震災の津波でかなり景色は変わっただしいけれど、私の記憶はタイムスリップして、懐かしい思い出をスフレに話した。一緒に歩いたことは絶対忘れないよ。

そのスフレも今年3月に盲導犬を引退した。新たなパートナーは素直でシャイなジーン。どのように付き合い合えばいいのか、まだ戸惑いも多い。まずはジーンの好きな事、苦手な事を見つけよう。そして心のアルバムに思い出をたくさん貼り付けていきたい。

「ナンバー1」だからって　言うこと聞いてくれないよ
この子たちが見ているのは私たちの「うれしそうな横顔」

「そうさ僕らは」
つらいこともあるけど　苦しいこともあるけど
まだそれは続くかもしれないけど

あなたも私もこの子たちも「もともと特別なオンリー1」
障害を持っていたとしても　何かを成し遂げられなくても
この「道」をパートナーの君とにこやかに歩いて行こう
この「道」にささやかに咲いている花をさがしてみよう

「あのとき僕に笑顔をくれた」
その時その「世界に一つだけの花」は　もうすでに咲いているんだ



◀2016年12月17日、富士ハーネスの「キャンダルナイト」に参加して

毎日の散歩道が苦手な道に！？

関東伸雄さん (56) / 神奈川県 / 神

ミルク (LR ♀) ←ローズ (LR ♀) ←ルミ (LR ♀)

盲導犬と歩き始めてはや18年がたちました。この間、ルミ、ローズ、ミルクの3頭が、私の相棒になってくれました。

私の昼休みの散歩は職場から「四季の森」までの片道約1キロのルートが定番。ここはとても広い公園で、その名の通りいつも四季折々の草花が咲いています。ルミと池に落ちてずぶぬれになったり、ローズが勇敢にも大きなカマキリを捕まえたりと、私にとっては思い出のいっぱい詰まった大切な場所です。ところが困ったことに、現在のミルクにとって、この道が大の苦手になってしまった時期がありました。

もともと気が小さいミルクは、私の方にかぶって歩く癖がありました。それを矯正するために注意を与えたところ、どうや

ちょっとしたしぐさや表情から何して欲しいか分かるように

石井孝司さん (57) / 神奈川県 / 神

ヘブン (LR ♂)

県立学校の事務職員として24年間勤務するも、視力低下で退職。筑波技術大学へ社会人入学し、「あはき業」の国家資格を得て2011年4月から高崎市で訪問マッサージ、2012年11月からは横浜市で機能訓練指導員の仕事をし、現在に至っています。

盲導犬の貸与を受けようと考えたのは、学生時代に身近にユーザーがいたということもありますが、高崎で夜間の対向車ライトに異常なまぶしさを感じたり、夜に物が見えにくくなり歩行の不安を覚えたりして、受診したら身体障害者認定されたこと、横浜での通勤路が狭くて歩行が一層怖くなったこと、また駅や街を歩くととき人や物にぶつかることが多くなったこと、などからでした。貸与申請から約2年半の待機後、ヘブンと2015年11月から一

新しいシャボン玉をたくさん作るために

大沢郁恵さん (36) / 神奈川県 / 神

レディアン (LR ♀)

私は網膜色素変性症という病気です。やがて失明する恐れのある病気です。目が悪くなるにつれ、今まで普通にできていたことが徐々にできなくなっていきました。それはまるでシャボン玉がばちんばちんとはじけて消えていくようでした。

「このままじゃいけない」と盲導犬と過ごすことを決めたのですが、当時の私は盲導犬がいれば、目的地に迷うことなくたどり着けると勘違いしていました。皆さんご存知の通り、盲導犬は歩行の補助をしてくれるだけで、目的地への方向の指示などはユーザーが行います。つまり、私がかかってないとやっぱり迷うんです。でも、レディアンと一緒になら、迷うことさえ楽しい。はじけてしまったシャボン玉とは色も形も違うけど、楽

らミルクはそれが「怒られる道」だと勘違いしたようなのです。私がいまりに注意するので周囲の人たちが心配し、職場や盲導犬協会に連絡が入ったこともありました。しかし約1年間、めげずに歩き続けた結果、ようやく苦手意識を克服してくれました。



▲苦労した分、気持ちの強い子に成長してくれました

信頼関係を作るのに時間がかかったけれど、私も強い気持ちで接したことで、ミルクは私が感心するほど強い気持ちを持つまでに成長しました。これからいろいろなことがあるだろうけど、一步一步大地を踏みしめて歩いて行こうな、相棒。

緒に生活を始めてもうすぐ2年です。職場では「かわいい目をしている子だね」とかわいがってもらい、外出先でも声をかけられます。ヘブンと一緒にだと夜間や人混みも安心して歩けるようになったと感じます。最近では、ヘブンのちょっとしたしぐさや表情から、何をして欲しいか少しずつ理解できるようになり、徐々に信頼関係が築けているのかなと考えています。今後約7年間をお互いに良いパートナーとして助け合い、生活や外出、旅行など楽しく過ごしていきたいと思っています。

▲これからの年月を、仲良く楽しく過ごそうね

しいシャボン玉を新しく作ることができる。たくさん、たくさん。盲導犬は生き物です。病気になったり、排泄したり、気分が乗らなかったり、大変なことももちろんあります。それでも、それを上回るよるこびをレディアンはくれます。さあ、レディアン。次はどこへ行こうか。海外？ 登山？ スキー？ 楽しいたくさんシャボン玉をぶかぶか浮かせながら、楽しい「移動」をこの子としていければと思います。



◀新しいシャボン玉の一つが旅行。富士山を背景に記念撮影

“信頼、を超えた”心頼、

抱井康夫さん (68) / 神奈川県 / 神

オマリー (LR ♂) ←キャニー (LR ♂)

「おはようございます」「あっ、おはようございます」「お目が悪かったんですか？」。キャニーと歩き始めてどれくらいたった時か、ある女性がこんな挨拶を。思えば、それまで誰かと挨拶を交わすことなんて、あまりなかった。

高校生の頃から、目のことがコンプレックスでした。とがっていました。イライラ、カリカリしていました。誰ともなくぶつかっていました。そして目が悪いことを「格好悪い」「みっともない」「まして白杖を持つなんて」と考えていました。だから私は意地になって、一人で必死に歩いていました。しかし女性から挨拶をされた時に、ふと思いました。「これまでは、挨拶されていたのに気づかなかっただけかもな」と。

実際、盲導犬と歩き始めてから、私にある変化が訪れました。それは目が悪いことを認めたくなかった私が、いつしか視覚障害者であることを受け入れるようになっていたこと。それまでは社会との間に壁を作り、「ありがとう」さえめったに言えなかった私が、気がつけば、いろいろな方の手助けや声かけに、素直にお礼を言えるようになっていました。それはパートナーたちからの、大きな大きな贈り物でした。

彼らは私に「時間」もプレゼントしてくれました。それまではちょっとした用事でも、介助をお願いする方の都合でしか行

僕と一緒に歩くのが君たちは大好きなんだ

岩下秀明さん (58) / 神奈川県 / 神

レノ (GR ♂) ←レオ (LR ♂)

レオ君と出会ったのは2004年だったね。イケメンで、毛がツヤツヤで足が長くて、僕はそれが自慢だったんだよ。街を歩くと「きれいなワンちゃん。賢い顔だね。速く歩くんだ」と、よく言われたっけね。フォローアップで訓練士さんに「ちょっと速すぎますよ」って注意され少しゆっくりにしたけど、また風を切って歩いたね。

レオ君は食いしん坊で嘔吐と下痢でダウンしたこともあったけど、懲りないのが君らしさだよ。僕の仕事で電車に乗ってあちこちへ行ったね。とても助かったよ。11歳で引退してお母さん（私の妻）が引退犬飼育ボランティアになり、うちで暮らすことになった時、新盲導犬のレノが加わっても自然に受け入れたね。いつまでも一緒にいたかった。急だったけど、苦しむことなく、眠るみたいだった。命と命の出合いは、偶然を装っているけど、そこに奇跡的な何かがあるのではと、レオ君と歩んだ日々を思い返すと、そん

動できなかったのに、彼らのおかげで「自分の時間で行動する自由」を得ることができたのです。

もし「盲導犬を信頼していますか？」と聞かれたら、私はこう答えるでしょう。「私にとっては”信頼、”というより”心頼（心のよりどころ）、です」と。実際、東日本大震災が起こって実感しました。「盲導犬が傍らにいてことで、こんなに安心できるものか」と。

ある時、古くからの友人に言われました、「丸くなったなあ」と。自分では「そうかな？」と思うのですが、丸くなったのだとすれば、それは盲導犬たちがくれた ”心頼、のおかげか”もしれません。



▲盲導犬生活は、”心頼、”も運んで来た。オマリーと行く

なふうに感じるんだよ。レノと歩くようになったある日、電車で気になる話が聞こえてきたんだ。「いや応なしに仕事させられてかわいそう」「盲導犬はストレスが多いから長生きできないんだ」――。「何を根拠に言うんだよ」って返したかったけど、気が弱くて言えなかった。逆に「盲導犬だ。お仕事をする賢いワンちゃんだね」と褒められるし、僕も「今は仕事だから、触らないでね」と言うけど、レノにすれば「お仕事って何？」ってmondだよ。盲導犬は長生きだっていう説を聞いたこともあるんだ。その秘訣は、ストレスが少なく無理のない生活だからと思うんだよ。僕が外出の支度を始めるとレノは尻尾フリフリですり寄ってきてね。「お父さんと一緒に街を歩き、電車に乗るのが楽しくてたまらないんだ。イヤだけど仕事だから、なんて思っている訳ないじゃない」、レノはそう言っているよ。

盲導犬は長生きだっていう説を聞いたこともあるんだ。その秘訣は、ストレスが少なく無理のない生活だからと思うんだよ。僕が外出の支度を始めるとレノは尻尾フリフリですり寄ってきてね。「お父さんと一緒に街を歩き、電車に乗るのが楽しくてたまらないんだ。イヤだけど仕事だから、なんて思っている訳ないじゃない」、レノはそう言っているよ。

【参考資料】盲導犬の平均死亡年齢について（日本身体障害者補助犬学会、2007）/ 水越美奈、下重貞一 https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssdr/1/1/1_1_60/_article/-char/ja/



◀今日もさっそうとレノと笑顔で歩く

一緒にヨットに乗ることも。リルハに感謝！

小倉恵子さん (58) / 神奈川県 / 

リルハ ( ♀)

50年という節目にユーザーのkeikoさんとのユニットで、盲導犬としてお仕事をさせていただいている奇跡に感謝しております。

私、リルハは2012年8月9日に富士ハーネスで生まれました。弟妹5頭のうち、女子4頭は全員盲導犬デビュー。私はデビューして2年がたちました。誕生月には、妹のレディアンと一緒に「生んでくださってありがとう」の気持ちを花束にして、母・レミーのお家に行きました。

keikoさんは平日はお仕事。土・日は趣味のヨットに行きます。ヨットののない日は、お芝居や落語に行ったりお友達とお茶したり、おまけに病院にも。お出かけ派ですね。

ヨットの時は、私はマリーナのクラブハウスでお留守番。たくさんのセーラーさんたちが出入りしていて、



声をかけてくれたり頭をなでてくれたり。keikoさんには内緒ですが、まれにお散歩に連れ出す人もいます。さすがにおやつだけはご遠慮いたします。でもたまに大型艇でレースをする時には乗せてもらいます。タモリカップには2回出場。最初の年は猛暑、去年は土砂降り。セーラー・リルハは赤いカッパで頑張りました。

＊

この2年間に、私とリルハは多くのボランティアさんと知り合いました。繁殖犬、引退犬、パピー、キャリアチェンジ犬、PR犬等々。そしてこの方々に支えられて盲導犬が誕生していることを痛感いたしました。協会の訓練士さんをはじめ、盲導犬誕生に関わる皆さんに感謝いたします。リルハは体重20キロの小柄な盲導犬ですが、どんな天気の日も尻尾を振って楽しそうにお仕事してくれます。私はただそれだけで感謝なんです。

◀クルーの一人として、重要な役目を果たしています

世界中で誰より盲導犬を見てみたいのが私たちユーザー

神崎好喜さん (67) / 神奈川県 / 

カリテ ( ♂) ←ラク ( ♂)

ある朝目覚めると、私の目に光が戻っていた。さあ、計画実行の日だ。見えることを気付かれてはならない。いつものように手探りしたりぶつかったり、ワンツーベルトを着けるときもまず犬の頭に触れて見えないふりをする。「よし、気付かれていないぞ」とわくわくしながらつい喜びが笑みになってこぼれてしまう私。そしていざ外出。

わざとおぼつかないしぐさでハーネスを着け、「カーク（仮名）、レフトゴー」と指示する。しばらく歩いた所でおもむろに計画開始。そっとカークの表情をのぞき込む。あれっ、何だか表情が硬いぞ、気付かれたか？「カーク、グーッッド」と言ってみる私。その途端、カークが笑った。目を合わせてはいけない。でも確かに私を見上げて「父ちゃん、その一言が欲しかったんだ」と目で訴えてくるカーク。尻尾の振りも大きくなり、尻尾の先が私の膝の裏に当たる。そして鼻歌でも歌っているか



のような歩きに変わった。「へえ、表情も態度も歩きもこんなに変わるんだ」と驚く私。でもその驚きはぐっと心に抑え込む。交差点に来た。段差で止まるカーク。「グッド、カーク」と褒める私。「ぼく上手でしょ」と私を見上げるカーク。そこには満足そうで自慢気なカークの表情があった。でもすぐ正面に向き直るカーク。その目は再び真剣の色で満たされた。交差点の信号が変わった。「ストレイトゴー」。その瞬間、カークが止まった。「父ちゃん、出ちゃだめ」と踏ん張るカーク。私たちの前を自転車猛スピードで横切った。走り去った先をにらみつける私、カークはと見ると「ぶつからないでよかったね」とほほ笑むようなまなざしを投げかけてくる。なんていいやつなんだ、カークは。これが盲導犬なんだと反省の私。

いつも一緒だからこそ、たった1分でもいい、ほんの1秒でもいい、ラクやカリテの表情やしぐさを見ることができたら、後は再び光を失ってもいいと、私は思うのです。ラク、カリテ、ありがとう。

◀ユニット出発式へカリテと一緒に

人が人を思う優しさが出した答え～それが盲導犬という存在

大堀紀子さん (71) / 神奈川県 / 

ジャネット ( ♀) ←ニッキー ( ♀)

「なぜ人ではなく犬なのか？」

ある小学生からそう尋ねられた私は、何だかとでもうれしくなりました。だって、これこそ「盲導犬って何？」という命題の根幹でもの。

私は「目の不自由な人は白杖か盲導犬と歩きなさい」と法律に記されていることに触れた上で、こう答えます。「人だといつも一緒にいてもらうことは難しい。その点、訓練された盲導犬はいつもそばにいてくれるし、私を導いてくれるすてきな能力を持っているの。だから私は好きな時に、行きたいところに自分の意思で行くことが出来る。それはとても幸せなことだと思わない？」

最初のパートナー・ニッキーを貸与されたのは2008年1月。光すら見えない夫・裕康と共同でお世話になるタンDEM犬でした。「何とたおやかな子



だろう」が第一印象。当初はまるで子育てのようでしたが、美しく、優しく、そしてものおじしないニッキーは多くの方に愛され、私たちにも多くの友人や知人が出来ました。6年前に夫・裕康が急逝した後も、毎日二人で夫の遺影に「おやすみ」と言

って寝たものです。ニッキーが引退するその日まで。

そんなニッキーの後を引き継いでくれたのが、黒ラブ、のジャネット。甘え上手で恥ずかしがり屋の彼女ですが、盲導犬としてはとても高度な歩行技術を持つすてきなパートナーです。先日1週間ほど別居をした時などは、もう寂しくてついついホロリ。私にとって、ジャネットがかけがえのない存在になっていることを痛感した出来事でした。

なぜ人ではなく犬なのか？ それはきっと歴史の中で「目の不自由な人間にはどんな存在が必要か」と考え、動いてくれた人々の優しい心が出した答えなのでしょう。私はそれを思うたび、感謝と喜びに包まれるのです。

◀男性を魅了するジャネットのチャームな目のしぐさ

盲導犬が、私を孤独感から解放してくれた

早乙女松男さん (69) / 神奈川県 / 

グラッド ( ♂) ←ハック ( ♂)

私は現在、毎朝1時間ほどの散歩を楽しんでいる。この習慣ができたのは2009年夏、盲導犬と生活するようになってからである。もともと弱視であった私は、10年ほど前に網膜剥離を起こし、視力がかなり低下してしまった。2年ほどは白杖歩行を行っていた。この時は、歩行は目的地に行く手段であり、散歩なんて考えたこともなかった。

私に散歩の楽しさを教えてくれたのが1頭目のハック。現在は2頭目のグラッドがその役を引き継いでくれている。

朝起きてから、すぐにパートナーの排泄を済ませ、「今日はどこを通ろうか」と話しかけながら歩き始める。いろいろなコースを選んだり、それらのコースを逆方向に歩いたり、途中で

横道に入ったりして、時には道に迷うこともある。迷っても周りには人がいるし、ケータイも持っているし、心配はいらない。のんびり歩くことを楽しんでいる。季節の変化を感じたり、ご近所さん、時には「犬友」との交流もある。



▲今日はどこへ行こうか。グラッドと庭先でのある日の一コマ

白杖歩行では、常に孤独感を感じていた。歩行中は緊張しまくり、目的地に着くとどっと疲れが出た。盲導犬歩行では孤独感をまったく感じなくなった。パートナーと一緒に歩いている、この感覚は私の心に大きな変化を与えたのである。

生きる意味とは？ 人間は追求するが、盲導犬は知っていた

南野恵子さん（64）／神奈川県／

ハンナ（ ♀）←ティティ（ ♀）←アナ（ ♀）←ミルキー（ ♀）

私にとって4頭目になるハンナは、訓練ではその優秀さを発揮し、そつなく淡々とこなしていましたが、私には「あなた、だれ？」と言うように一歩引いて私をしっかりと観察しているような子でした。夜、私がベッドに横になりハンナを呼ぶと、一度は仕方なく私の真横に来て寝ますが、すぐにまた自分の場所に戻り一人で寝る。こんなに警戒されたのは初めての経験でした。でも1か月が過ぎた頃にはおなかを見せて甘えるようになってくれました。今では私がお掃除をしたり、キッチンに立っていたり、洗濯物をたたんでいたりすると、ハンナは自分の枕がある壁側ではなく、私の匂いのする枕に頭を置くこともあります。そんなハンナがいとおしく、そっとタオルケットをかけて抱きしめてしまいます。

ハンナがきて1年が過ぎようとした頃、横浜のデパートへ靴の購入に行った時のことです。店員さんが「何足かお持ちします」と立ち去って待っている間、ハンナを定位置の左横にダウンさせていました。広いフロアの中、店員さんは両手に靴を持ち速足で向かってきたのだと思います。するとハンナは、いきなり立ち上がり私の前にはだかりました。「盲導犬がご主人を守ろうとする意識が強いとは聞いていましたが、この目で見たのは初めてです。靴が凶器か何かに見えたのでしょうか」。私も笑いながら「ヒール」でハンナを左横につけ「ダウン」と言いましたが、聞きません。じっと店員さんの持っていた靴を見ていたようです。ハンナが二人きりで暮らす日々の中、私を守らなければならない存在なのだと認識



▲いつも守ってくれるハンナ、散策中も安心です

してしてくれたことに、うれしさと誇らしさを感じずにはいられませんでした。

2020年、東京オリンピックに沸く年に協会へハンナを返すことになりますが、過去3頭の素晴らしい盲導犬を含めて同じ別れを経験したことはありません。その中で2頭目アナとの別れが忘れられません。アナは引退後、子供のいない姉夫婦がわが子のようにかわいがってくれました。いよいよアナの命が尽きようとしていた頃、お医者様から「あと3日がヤマです。眠っているのかと間違うこともあります。気をつけてください」と言われ、姉は私に「アナは最期の時は恵ちゃんの所がいいんじゃないの」と気遣ってくれました。姉はもう起き上がることもできないアナを担架で私の所へ連れてくる予定でした。ところが驚いたことに、アナは歩いて玄関を出て行ったのです。姉が「恵ちゃんの所に行くんでしょ！ 恵ちゃんに会いに

いくんでしょ!」と語りかけると、アナは立ち上がったのです。私の住むマンションは駐車場から数段の階段を上り、エレベーターホールへ向かわなくてはなりません。私は祈る思いで待ちました。アナは食事を吐きもせず食べ、ワンツーマンでペランダへ出てくれて、ベッドの昇り降りも手を煩わせることはありませんでした。私は1日のほとんどをベッドでアナと過ごしました。2週間後、アナは姉の所に戻り3日目に永眠しました。あの日々の二人の時間は確かに、確かに止まっていたのです。アナを見送った日、姉が「アナは最後まで恵ちゃんのスーパー盲導犬だったね」と言った寂しげな響きが耳に残ります。人は生きる意味を追い求めるといった人がいましたが、盲導犬とはその生きる意味を教えられた動物ではないでしょうか。

パパさんと楽しむ人生・犬生

三浦廣行さん（64）／神奈川県／

ルーシー（ ♀）

私はイエローラブのルーシーです。パパさんとお出かけするのが大好きで、お休みの日でも6時になれば、寝ているパパさんの脇腹や肩先を鼻先でツンツンしてウォーキングへ。そのおかげでパパさんのおなかもスッキリしてきたみたい。

パパさんが一番好きなのは、三味線でチン、トン、シャンとすること。「新内浄瑠璃」っていうらしいんだけど、紋付きはかま姿で野太い声やカン高い声を張り上げちゃって、本当はいい迷惑。でもパパさんの一番の楽しみだから。

それからパパさんは映画も大好き。月に2、3回は音声ガイド付きの映画を見に行くんだけど、これがパパさんの唄や三味線の音がかわいく思ってしまうほどの大音響。だから私は前足

で両耳をビタリと押さえてシャットアウト。

落語を聞くのもパパさんにとっては大の楽しみ。浅草演芸ホールと一緒に行く時は、お昼はおそば、夜はもんじゃ焼きがパパさんお決まりのコースなんだって。でも私はワンちゃんフードが好きなのにな。



◀あんまり長くてつついつい大あくび。一緒に唄ってる、なんて思わないで

勤務先の特養老人ホームのイベントで大活躍したボーテ

落合真智子さん（30）／神奈川県／

ベリー（ ♀）←ボーテ（ ♀）

ボーテは初めてのパートナーで、一緒に暮らして8年。私は生まれつき左目が全く見えず、右目は重度の弱視でした。お医者さんから「将来、失明します」と言われましたが、人の役に立ちたいという願いも強く、三療（はり・きゅう・あん摩マッサージ指圧）の資格を取ろうと筑波技術大学へ進学しました。入学した夏に右目を失明しましたが、見えなくなったことより、できることが減った方がショックでした。白杖の歩行訓練でしたが、怖くてなかなか一人で出かけられませんでした。いつも、友達やガイドヘルパーさんと外出していましたが、やはり一人で出かけたい時に出かけられたらと思い、日本盲導犬協会で体験歩行をして、盲導犬と歩こうと決意しました。

貸与の申請をしてから2年待ち、ボーテと出会いました。共同訓練は大変でしたが、何より風を感じながら一人で歩けた喜びは今でも鮮明に覚えています。ボーテと生活を始めて、最初は排泄リズム、歩行がうまくいかず、あまりの大変さに泣く日もありましたが、徐々に慣れてきて、やがて「あそこに行こう」「ここに行こう」と週末が楽しみになりました。友達と一緒にお花見に行ったり、東京・お台場に行ったりと、学生生活がそれまで以上に充実してきました。

ボーテとの信頼関係、生活リズムが安定し、つくば市内のデイサービスでの機能訓練指導員としての就職も決まり、卒業式や引越しなど新生活への楽しみが近づいた2011年3月11日に東日本大震災がありました。出先で突然大きな揺れがあり、とても怖く、ボーテは震えて歩けませんでした。どうしようかと思案していたらお店の方が大学まで車で送っ



▲ボーテはお花見も大好きだった。「きれいだなあ」

盲導犬との生活は、歩き、健康、旅から人生まで

清水健男さん（75）／神奈川県／

エアロ（ ♂）←ロッキー（ ♂）

私はそもそも犬が怖くて嫌いでした。仕事に就いていた時は1日1万歩を目標に歩きましたが、退職後は歩かなくなったせいか体力が一気に落ちました。それが顕著に現れたのが趣味のフルマラソンで、30キロを過ぎると走れなくなりました。解決法は盲導犬と一緒に朝晩歩くことしかない、犬が嫌いだと言っている暇はないと考え、貸与を申し込みました。訓練3日目になると、盲導犬ロッキーのかわいらしさ、従順さ、魅力に引き込まれていました。

ロッキーとは、南は石垣島マラソン、北は利尻島のウルトラマラソンと、日本各地のたくさんのフルマラソンに参加してきました。私が42キロを走りきり、残り200メートルにロッキ

て下さり、とても助かりました。震災のために大学の卒業式も中止になり、余震も続き不安がいっぱいでしたが、ボーテがそばにいてくれたのが心強かったです。

その年12月に横浜市へ引っ越して、2012年1月から特別養護老人ホームの機能訓練指導員として働き始め、現在に至っています。ボーテは職場でも人気者で、施設の夏祭りやクリスマス会といったイベントでも大活躍しました。新しい職場や生活に慣れたので、週末はボーテと一緒に水泳などのスポーツやショッピングへ出かけ、友達と北海道や長崎・福岡の2泊3日旅行もしました。ボーテと歩いていると、旅行中はもちろんのこと日常でも多くの方から声をかけられました。

そのボーテも今年6月末に引退し、7月からは2頭目のベリーと暮らしています。これまでと変わらず、パートナーとの着実な歩みを紡いで行きたいと思います。



▲ボーテはお花見も大好きだった。「きれいだなあ」

ーを待たせておいて、一緒にゴールを切るのは最高でした。ロッキーは尻尾を大きく振り、ジャンプして喜びました。

エアロは2頭目です。私は障害者団体の役員をしており、時々、国会や政府機関、県庁などに行きます。エアロは堂々と電車や



バスに誘導してくれますので安心して行動できます。

最近、私の次男が結婚式を挙げ、エアロもお祝いに参加しました。「僕の兄ちゃん、おめでとう」。

◀「東京夢舞いマラソン」完走。伴走者は「オバQ」さん、ロッキーも仲良し

犬は苦手の私が、イーサンのおかげで盲学校へ通い始める

今村法子さん (67) / 神奈川県 / 

イーサン ( 男)

イーサンと私の生活が今年4月に始まった。犬は苦手気味の私だったが、共同訓練でイーサンを一気に好きになった。そして、私の日課とイーサンの日課が合体して、いつも一緒にいるのが当たり前になった。盲導犬との体験、登録の時点から、視覚障害者でもさっそうと自分の行きたい所に行けるように努力しようと決めた。

目が不自由になって、多くの方に手助けと支援を頼んできた。今までできていたことが出来なくなり、日常生活が不自由で不便、歯がゆくて悔しい。失敗は人に見せたくない、何か新たなことは億劫^{おっくう}でやりたくない。そんな気持ちだったが、登録の時に聞いた「自立して歩けないと盲導犬と一緒に歩けない」「盲導犬を持つことが目的でなく、その後、一緒にどんな生活がしたいかが大切ですよ」という言葉が心に残った。



◀イーサンのおかげで生活に張りが出た

その後の待機期間は、自立支援ホームでの白杖の歩行訓練、感覚訓練、日常生活訓練、点字の初歩の勉強、さらにパソコンやタブレットも視覚障害者が使えることなど多くを学んだ。工夫と努力で自分のしたいこと、できることが増えると実感した。そして、新しい目標がはっきりして、イーサンの認定を受けた

翌々日から盲学校への通学生活が始まった。

デビューして間もないが、小さな失敗が大きな「はなまるグッド」になるように、お互いに日々学習し、前進・進化しよう。外に出れば盲導犬ユーザーとして、堂々と私らしく、イーサンらしく、しっかりと歩きたい。イーサンとの生活は毎日が発見と喜びなのだから。

盲導犬を育てて下さる全ての方々に感謝して「ありがとう」。理解ある我が夫に感謝して「ありがとう」。